

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 4 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23593133

研究課題名(和文) 病院の看護をつくる実践知の記述的研究

研究課題名(英文) Descriptive Study on the Practical Wisdom in Hospital Nursing

研究代表者

西村 ユミ (Nishimura, Yumi)

首都大学東京・人間健康科学研究科・教授

研究者番号：00257271

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、総合病院における看護の実践知を、現象学及びエスノメソドロジーの方法を用いて記述的に探究することを目的とした。調査場所は、急性期病棟、看護部、救命救急センター病棟であった。調査はフィールドワーク及び継続的な個別インタビューによって実施した。データは、看護師たちの視点から、協働実践がいかに成り立っているのかを分析した。

分析結果より、患者の痛みの理解、緩和ケア、音の経験、時間経験、急変の編成、新人看護師の実践、管理の実践等々は、事象を生み出す文脈の中で、複数人の看護師の協働として成り立っていた。こうした協働実践によって、一人ひとりの看護師による患者のケアが実現していた。

研究成果の概要(英文)：This research was a descriptive study that used methods from phenomenology and ethnomethodology to look at the practical wisdom in nursing at a general hospital. The study was carried out at the acute care unit, the nursing department, the emergency care center unit, and the outpatient unit of a general hospital. The study was conducted through fieldwork and ongoing one-on-one interviews. The data was analyzed to determine how collaborative nursing takes form from the perspective of nurses.

The results of the analysis indicated that nurses' understanding of patient pain, the palliative care they give, their experience of sound, and their experience of time, as well as the formation of collaborative nursing teams when a patient's health status changes suddenly, and the practice of nurse management took form as collaboration among nurses in the context of a continuous unfolding of events. Patient care by individual nurses was performed through this kind of collaborative practice.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：協働実践 看護場面 現象学 エスノメソドロジー 実践知 病院

## 1. 研究開始当初の背景

看護学における「実践知」に関する研究は、Benner (1984/1992)らによって、1980年代より米国で報告され始めた。初期の研究は、アリストテレスに関するハイデガー研究をもとに、Dreyfus によって導き出された「熟練技能の四段階」モデルを看護へ応用したものである。熟練によって「フロネーシスを持つ人」は、「適切なときに適切な仕方であらうことを」「即刻」なすことができる (Dreyfus, 1991/2000)。実践的知恵 (実践知) とは、この技能のこととされた。

1990年代初頭に、わが国では、Benner らの一連の研究とともにその方法論である解釈的現象学が輸入され、看護実践を探究する方法論にも注目が集まるようになった。さらに Benner ら (1999/2005) は、研究領域をクリティカルケアなどに広げるとともに、実践知、熟練したノウハウ、卓越した看護実践の概念の記述を進めている。わが国においても、アリストテレスの思想を下敷きにした「実践知」に関する研究が、1990年代初頭から報告され始めた (例えば池川, 1991)。これらの研究は、実践学としての看護学の方法論などを哲学的に論じ、またエキスパートに限定せず広く看護実践を記述している。こうした下地が、1990年代以降、わが国での実践知に関する研究を少しずつ推進させ、自然科学の枠組みでは見落とされてしまう実践という営みの探求と方法論の模索を進めてきた。

先行研究を概観すると、実践知研究の多くが「熟練者」の技能習得やその実践と関連づけて探求されるために、熟練看護師の技能の特徴として説明されたり、個々の看護師の能力に帰属したものと探求される傾向にある。この個々人の能力という視点は、実践知と倫理的判断との結びつきも強くした (Nelson & Gordon, 2006/2007)。また、ある疾患やある症状を有する患者への援助構造としても探求されている (正木他, 2007)。

しかし、例えば病院の看護場面を見ても、複数の患者たちが入院する病棟では、複数の看護師たちが交代をしながら患者たちの24時間の日常生活を援助している。つまり実践知は、個々の看護師の能力や熟練者の技能の特徴、ある状態の患者への援助技能として探求されるのみではなく、複数人が協働する臨床的な場面において、その実践がいかに成り立ち、またそこへ参加する者たちによってそのつどの場面の実践がいかに遂行されているか、という切り口からも探求される必要があるだろう。

本研究課題は、この複数の看護師たちによる協働実践が行われている場を、患者とのかかわりの単位、病棟の看護師たちのチームという単位、病棟という単位、そして病院という単位に拡げて検討し、協働することによっていかに看護実践が成り立っているのかを探求する。

## 2. 研究の目的

本研究は、複数の病棟を有する「病院の看護実践」がいかに成り立っているのかを、(1) その協働実践を行うメンバーの一人である看護師と患者との相互行為、(2) その相互行為が為されている各病棟内での看護師や医療従事者の協働実践、(3) 全病棟を取りまとめる看護管理部門における会議や伝達、相談、という3つの視点から総合的に探求し、病院という組織において看護を成り立たせている「実践知」について考察する。

## 3. 研究の方法

「病院」内の2病棟、及び看護管理部門である看護部での様々な実践を、(1) 参加観察、(2) 看護師への非構造化インタビュー、及び(3) ビデオによる録画によって記録した。

データは、各部署の協働実践に参加している者たちが、どのようにその実践を成り立たせているのか、そこにはいかなる知が組み込まれているのか、そのあり方の詳細を、現象学、及びエスノメソドロロジーの考え方を手がかりにして解釈・分析した。

なお、本研究は所属施設の研究倫理委員会において審査を受け、承認を得て実施した。

## 4. 研究成果

### (1) 患者のケアを支える実践

看護師たちの語り、及びフィールドノートから、患者の痛みの理解、緩和ケアの編成、音の経験、時間経験、急変の編成、新人看護師の実践、管理の実践、病棟の方針の習慣化等々が、事象を生み出す文脈にそって、複数人の看護師の協働として成り立っていることが記述された。これらの成果から、一人の看護師が病棟の代表として一人の患者に向き合えるのは、そこで為される実践が病棟の看護師たちの協働的な実践の一部となっているためであった。

加えて、この協働実践は、一つの病棟内に留まるものではなく、「病院」全体との関係において達成されていた。言い換えると、病院の管理部門の実践は、病棟の看護師たちを支え、病棟の看護師たちは相互に協働することによってそれぞれの実践を達成しているのである。この全体の文脈の中で、一人の看護師が一人の患者に手を指し示す看護の営みが発現していた。

### (2) 病棟の管理という実践

ここでは、病棟の管理の実践に焦点を当てて、その管理がいかに編成されているのかを記述する。フィールドとした病棟は、A 師長、B 係長、C 係長の3人が管理者であった。

A 師長は、この病棟の「うまく回っていない」状態に対して、2つの方針を打ち立てた。具体的には、「みんな」という看護師たち個々人の課題と、病棟のルールや決まりという組織の問題とを分けて、前者に対しては、目標面接をして「どんな看護をしたいのか」を問

い、後者に対しては、「ルールを削って」いくことを提案した。これらは、予めA師長が方針として持っていたのではなく、病棟のスタッフたちの応答や、病棟の決まりの多さに驚いたことに促されて作られた。言い換えると、A師長が管理者として出した方針や指示は、スタッフたちの振り舞いや言葉、態度、そして病棟の状況等々に促されて決められていた。その意味で、出された方針は病棟のみに支えられた内容であったと言える。

この方針のもとで師長がこだわったのは、管理者からスタッフへの指示が「1(いち)」であることだ。それはみなが混乱しないためである。ただでさえ、病棟の仕事は時間内に終わらずに「うまく回ってない」状態にあった。こうしたこだわりより、師長が管理者として徹底したのは、方針や指示の内容だけではなく、問題を区別したり、方針を徹底したりすること、つまり方針や指示の出し方という“方法”であったと言える。

この方針や指示の出し方は、係長たちにおいて次のような形を成す。B係長が語ったのは、「管理の力」であった。B係長のもとでA師長の方針は、「調整力」と「時間管理」という表現に置き換えられた。そして、この両者が看護師たちに「合間、合間」に投げかけられ、次第に、「方針」を修飾していた「師長」は「病棟」に置き換えられ、人ではなく場が「方針」を示しているように語られた。そしてそれは、B係長において「病棟の習慣」として語られ、実践された。

同様の語りもC係長においても見て取れた。彼女が主題化して語ったのは、係長の目線であり、自分のこだわる実践の仕方であった。これをC係長は「患者さん中心」と表現した。ところがC係長は、この表現に容易に至ったわけではなかった。例えば係長の目線は、B係長と話をしつつ、また研修に出ることによって自らの見方が問い直され、それを繰り返してもなお「うまく言葉にできない」状態であった。この表現が生まれたのは、インタビューにおいてこれらを語り直し、インタビュアーの質問に応えることを通してであった。

ここで注目したいのは、この「患者さん中心」というこだわりが、C係長にとって「したい看護」であり、伝えたい看護であった点である。B係長においても、師長との目標面接において、したい看護を認められた。それはスタッフに伝えたい看護であった。

このように見てくると、A師長の方針である「みんなのしたい看護」は、係長たちの手元で認められたり、生み出されたりすると同時に、スタッフに伝えたい看護となっていた。この係長のしたい看護の生成が、同時に伝えたい看護になる構造が、師長の方針が病棟の方針になっていく土台であるといえる。

ここで、B師長が師長の方針を読み換えて語った「調整力」と「時間管理」について再確認したい。この2つの方針は、一見、「みんながしたい看護」と噛み合わないように思

われる。しかし、そもそも「したい看護」は、係長からスタッフに伝えられている。さらに、病棟の看護師たちは、相互に「したい看護」を基準にして認め合ったり、指導をしたり、伝えあったりしていた。そのため、こうした構造において、一人ひとりのしたい看護は、病棟の看護とも言える側面を持ち合わせているといえる。さらに、病棟外から手伝いに来た看護師にとっても、病棟のスタッフにとっても働きやすい病棟、つまり、他の看護師の仕事もある程度把握して、たがいに調整をしようこと。その実現において、「したい」看護も成り立ち、つくられるのである。

また、師長の方針が病棟の方針として習慣化するのを促したのは、こうした看護師同士が互いにしたい看護を伝えあうことのみではなかった。一つには、B係長が語ったように、スタッフ数が足りずに、病棟を超えて互いに助け合う機会が、これをより強化したともいえる。加えてC係長の語りでは、かつて働いていた病棟で、忙しさのあまり急いで仕事をした、その実践を厳しく批判した一人の係長に出会ったことが、C係長に「それは違うでしょう」というこだわりを生み出したことが紹介された。こうした事態の交差が、師長の方針を強化していた。この重層的な事態の絡み合いによって、病棟管理は実現し、その病棟の看護実践が生み出されていた。

### (3) 実践の素地としての実践知

A師長の方針の習慣化は、その方針の主体をA師長ではなく、病棟として表現することによって達成されたが、本研究では、この病棟の看護を支える管理の実践が、看護管理部門においても同様のスタイルで成り立っていることを検討した。

これらの検討より、病院の看護の実践知は、実践の成り立ちのスタイル、言い換えると、相手や場や状況に促されて成り立つ実践や管理の構造ともいえるだろう。それゆえ、実践知を、一人ひとりの判断や実践の能力に還元することはできない。むしろ実践知は、その判断や能力の生成のされ方にあると言えるだろう。

今後は、看護部の実践の詳細、及び全ての病棟が注意を向ける救命救急センターの実践を分析することによって、病院全体の看護の協働をより詳細に明らかにしたい。

## 5. 文献

- Benner, P., 1984, From Novice to Expert, Adison-Wesley Publishing Company.( = 1992, 井部俊子他(訳)ベナー看護論, 医学書院)
- Benner, P., Hooper-Kyriakides, P. L.& Stannard, D., 1999, Clinical Wisdom and Interventions in Critical Care, W. B. Saunders Company. ( = 2005, 井上智子(監訳)ベナー看護ケアの臨床知, 医学書院)
- Dreyfus, H., Being-in-the-World, Division 1, MIT Press, 1991.( = 2000, 門脇俊介(監訳)

世界内存在, 産業図書)

池川清子(1991)看護:生きられる世界の実践知(フロネーシス), ゆみる出版。  
正木治恵・黒田久美子・清水安子・瀬戸奈津江(2007)糖尿病看護の実践知, 医学書院。  
Nelson, S. & Gordon S., The Complexities of Car, Cornell University Press, 2006. (=2007, 井部俊子(監修)ケアの複雑性, エルゼビア・ジャパン。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 8件)

前田泰樹, 急変に対応する, 現代思想(査読無) 41(11) 2013, pp.191-203.

西村ユミ, 身体性と看護実践の編成, 日本赤十字看護学会誌(査読無) 13(1) 2013, pp.55-59.

西村ユミ・前田泰樹, 事象の方に示される通りに, 看護研究(査読無) 45(4), 2012, pp.400-408.

西村ユミ・前田泰樹, 時間経験と協働実践の編成, 看護研究(査読無) 45(4), 2012, pp.388-399.

西村ユミ, 時間経験と看護実践の編成, メルロ=ポンティ研究(査読無), 16, 2012, pp.27-40.

西村ユミ, 「音」の経験と看護実践の編成, 現象学年報(査読無) 28, 2012, pp.1-11.

前田泰樹・西村ユミ, 協働実践としての緩和ケア, 質的心理学研究(査読有)11, 2012, pp.7-25.

西村ユミ, 「学問的協働をつくる現象学的研究——看護の立場から」第30回日本看護科学学会学術集会, 指定交流集会, 看護の学問的協働の展開, 日本看護科学学会誌(査読無) 31(2) 2011, pp.103-105.

[学会発表](計 17件)

西村ユミ・前田泰樹, 勤務の始まりを作る, 第40回日本保健医療社会学会大会, 2014年5月17日(仙台)

Hiroki Maeda, Yumi Nishimura, The Nursing Station as a “Center of Coordination”: A Study of Work in an Acute Care Ward, 19th Qualitative Health Research Conference, 2013.10.27(Halifax, NOVA SCOTIA, Canada)

西村ユミ, 病棟の実践を身体化する構造, 第23回日本保健科学学会学術集会, 2013年10月5日(荒川)

Hiroki Maeda, Ascertaining pain: A study of work in palliative care by nurses in an acute ward, 2013 IEMCA Conference, 2013. 8. 5-8(Waterloo, Ontario, Canada)

西村ユミ, 医療実践における患者理解, パネルディスカッション: 医学教育における行動科学, 第45回日本医学教育学会大会, 2013年7月26日(千葉)

西村ユミ・前田泰樹, 急性期病棟の管理の編成——病棟師長及び係長の語りに注目して, 第39回日本保健医療社会学会大会,

2013年5月18日(埼玉)

Hiroki Maeda, Yumi Nishimura, Temporal and Spatial Order in the Collaborative Work by Nurses in Acute Care Ward, 18th Qualitative Health Research Conference, 2012.10.24 (Montreal, PQ, Canada)

Yumi Nishimura, Hiroki Maeda, Collaborative Work by Nurses in an Acute Care Ward, 18th Qualitative Health Research Conference, 2012.10.23 (Montreal, PQ, Canada)

前田泰樹, 社会的実践を記述する, 委員会企画シンポジウム: 社会的実践と質的研究 日本質的心理学学会第9回大会, 2012年9月2日(横浜)

西村ユミ, 身体性と看護実践, シンポジウム: 看護技術の再構築 - 身体・こころ・技術, 第13回日本赤十字看護学会学術集会, 2012年6月17日(駒ヶ根)

前田泰樹, 急性期病棟の看護の時間的・空間的編成, ラウンドテーブル・ディスカッション: 複数の医療従事者の参加する協働実践を記述する, 第38回日本保健医療社会学会大会, 2012年5月20日(神戸)

西村ユミ・前田泰樹, 急性期病棟における看護の協働実践——師長の視点に注目して, 第38回保健医療社会学会大会, 2012年5月20日(神戸)

前田泰樹, 測定装置のエスノメソドロジー, ワークショップ: 哲学と社会学のコラボレーションのために( ) 応用哲学学会第4回年次研究大会, 2012年4月21日(千葉)

西村ユミ・前田泰樹, 協働実践における「時間」の編成, 第31回日本看護科学学会学術集会, 2011年12月3日(高知)

西村ユミ, “音”の経験と看護実践の編成, シンポジウム: ケアの現象学, 日本現象学学会第33回研究大会, 2011年11月5日(京都)

西村ユミ, 看護実践とメルロ=ポンティの思想との往還, シンポジウム: メルロ=ポンティと看護, メルロ=ポンティサークル第17回大会, 2011年9月17日(神戸)

西村ユミ, 現象学的研究の普遍性について, シンポジウム 研究方法論の普遍性と多様性, 第37回日本看護研究学会学術集会, 2011年8月8日(神奈川)

[図書](計 1件)

西村ユミ, 青土社, 看護師たちの現象学協働実践の現場から, 2014年6月, 284頁.

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

西村 ユミ (Yumi Nishimura)

首都大学東京・人間健康科学研究科・教授  
研究者番号: 00257271

(2)研究分担者

前田 泰樹 (Hiroki Maeda)

東海大学・総合教育センター・准教授  
研究者番号: 00338740